

岩屋後古墳

IWAYAATO

発掘調査概報



島根県教育委員会

例　　言

1. 本書は昭和 52 年度におこなった岩屋後古墳発掘調査の概報である。
2. 遺跡は昭和 45 年 10 月 27 日付で県指定史跡となっており、同時に周辺の公有地化もなされている。しかし風化等による自然消滅の可能性も出てきたため、復原整備計画をたてるまでの基礎資料を得ることを目的として国庫補助を得て調査を実施したものである。
3. 調査組織

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 島根県文化財保護審議会委員 山本 清

同 奈良国立文化財研究所技官 町田 章

調査員 島根県教育委員会文化課係長 蓮岡 法時

同 主事 横山 純夫

同 ト部 吉博

八雲立つ風土記の丘資料館臨時職員 平野 芳英

調査補助員 明治大学学生 井上 寛光

島根大学学生 石川 公士

調査協力 出雲玉作資料館学芸員 脇部 衆

調査期間 昭和 52 年 10 月 20 日～同年 12 月 27 日

4. 発掘調査に際して、地元有部落の方々、および八雲立つ風土記の丘資料館職員の方々には終始献身的な協力を賜った。また東出雲町在住の遠藤紀美子女史には実測図面の整理、経書等諸々にわたくって援助していただいた。厚く感謝の意を表したい。
5. 本書中の高さはいずれも海抜高である。
6. 本書挿図中、第 9・10 図に掲載した埴輪はいずれも東京国立博物館の所蔵にかかるものである。
7. そのうち、第 9 図の埴輪実測図については故近藤正氏が生前作成されたものを加代子未亡人の御厚意により掲載させていただくものである。
8. 出土遺物のうち皮袋形須恵器について、奈良県立橿原考古学研究所所員千賀久氏および島根県教育委員会文化課主事清水真一氏から有益な御教示をいただいた。記して厚く謝意を表したい。
9. 本書の編集・執筆は上記調査員のうち横山、ト部、平野の 3 名が協同して行なった。

1. 調査にいたる経過

昭和47年9月に開所した「八雲立つ風土記の丘」は意宇平野周辺に散在する遺跡群の統括的管理を意図したものだが、開所当時はいくつかの代表的な遺跡の調査・整備にとどまり、地内に含まれながらも未指定・未整備の遺跡も少なくなかった。島根県教育委員会ではこのような事情に鑑み、風土記の丘整備構想の一環として地内に所在する遺跡の買上げ、整備を前提とした発掘調査を計画した。調査する遺跡は、早晩消滅する危険性が高いこと、復原整備が可能のこと、学術的にみて調査の意義が大きいこと等を基準とし、昭和48年から3か年実施した出雲国分尼寺跡発掘調査につづく遺跡として岩屋後古墳を選んだ。

岩屋後古墳は古くからその所在について知られていたが、特に明治年間に多数の人物埴輪が耕地整理に伴って出土したこと、県下でも最大規模の石棺式石室を内部主体にもつことから広く周知されるにいたり、昭和45年10月に県指定をうけ、周辺の水田を含めた土地買上げがなされた。しかし埴丘の流失、破壊が著しく、またそれに伴って石室上半部が露出し風化が急速に進んできただため早急に整備の必要をせまられていたものである。したがって今回の調査はあくまでも近い将来の復原・整備を前提とし、周辺をも含めた遺跡の保護対策立案のための資料を得ることを目的としており、昭和52年度文化庁文化財保存事業費にかかるものである。

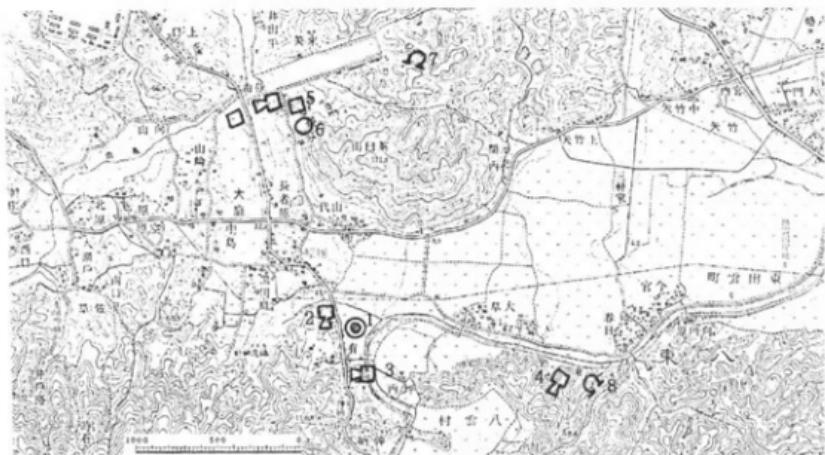
調査は昭和52年10月20日から測量調査に入り、同年12月27日の遺構埋め戻し完了をもって全行程を終了した。その間山本清島根大学名誉教授、町田京奈良国立文化財研究所技官には数回にわたる現地指導をいただき、平野芳美、井上寛光、石飛公士の各氏および地元有志の方々には調査員、補助員、作業員として終始献身的な援助をいただいた。さらに勝部衛出雲王作資料館学芸員には貴重な休日を割いての指導をうけ、期間中に開催された日本考古学協会松江大会に出席された先生方からも有益な御教示をえた。今回の調査が当初の目標をほぼ達成し得たのもこのような方々のお力添いの賜と厚く感謝している次第である。

2. 周辺の環境

岩屋後古墳（第1図1）が所在する地番は、松江市大草町字岩屋後878番外である。風土記の丘センターのある岡田山丘陵と県道をはさんだ東側の水田中に位置し、北へ向かって流れていた意宇川が流路を東へ変換する地点にあたる。明治年間に県道の開通に伴い周辺一帯の耕地整理がなされており、現在は水田中に孤立する本遺跡も当初は低丘陵の麓部に位置していたとみてよからう。

さて周辺に分布する古墳をみると、古墳時代中期以降の比較的新しい時期の築造にかかるものが圧倒的に多いという事実が指摘できる。中でもいわゆる後期古墳は質・量共に勝れ、古代出雲文化がこの地で開花したことを知るに十分であり、この地に「八雲立つ風土記の丘」が設置され

た理由の一つもそこにある。この地に分布する後期古墳は内部主体の様相等からみて3種に大別できる。1つは本墳をはじめとする石棺式石室をもつ古墳で、他に山代円墳（第1図6）、同方墳（第1図5）、古天神古墳（第1図4）があげられる。2つはいわゆる横穴式石室をもつ古墳で、岡田山第1号墳（第1図2）、御磯山古墳（第1図3）がある。そして今1つ墳丘を持たない横穴墓があげられる。安部谷横穴群（第1図8）、十王免横穴群（第1図7）等その代表格である。これらは被葬者階層の限定が現段階では困難な横穴式を除き、いずれもこの地を統治した首長層の奥津城であることはその規模・副葬品等からして明らかである。しかしその分布状況をみると1つの素朴な疑問がわく。すなわちそれらのすべてが6世紀後半から7世紀初頭の比較的短かい期間に相ついで築造されたと考えられるにもかかわらず、このように墓制に違いが出るのは何に起因するのだろうかということである。横穴式石室はいずれも片袖形で自然石あるいは割石を持ち送り式に小口積みにするといったいわば外来的な要素を強く持つにもかかわらず、墳丘は前方後方形といった出雲的色彩の濃いものを採用している。また石棺式石室は本墳にみられるように切石の1枚石を組み合わせ、玄室平面形を横長にするといった出雲独特の葬風である。これら両者の顕著な相違は同族者の墓ということにはほど違い印象をうける。しかしそれらの古墳の立地をみると限りにおいてお互いが対立関係にあったこともうかがえず、彼らの持っていた権力の集大成としてこの地に出雲国庁・国分寺が造立されたことを考えるならばそれぞれの系譜を探ることこそ古代出雲を解明する手がかりになるであろう。



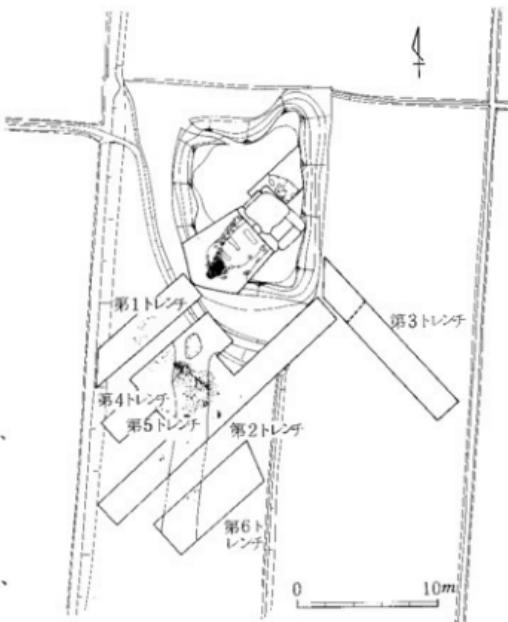
第1図 遺跡の位置と周辺の環境

3. 発掘調査の概要

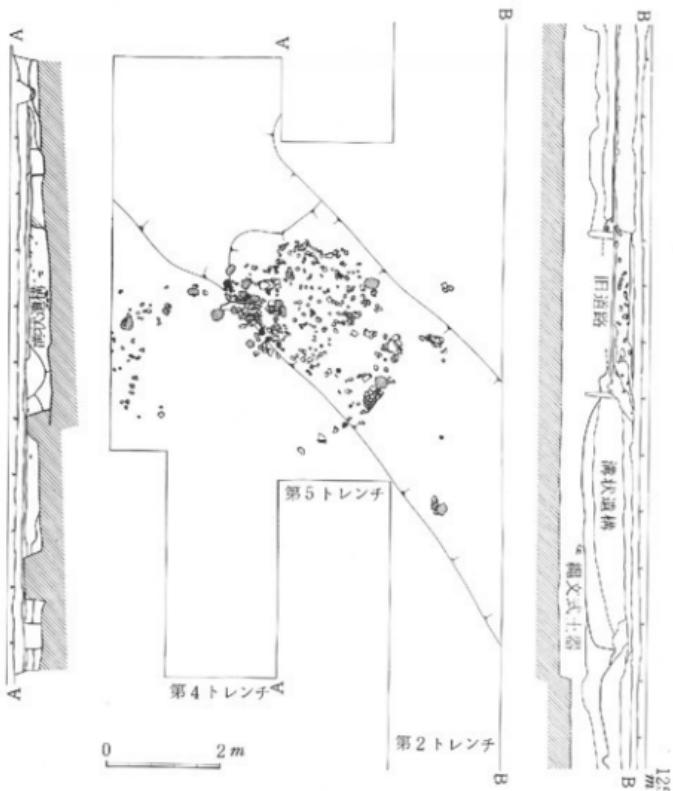
調査は古墳の墳形および規模の確認、石室構築法の検討を中心とした。したがって前者は石室主軸を基準にしたトレンチによる墳裾部分の調査、後者は現在露出している石室につながる羨道部等の状況を全面発掘により行なった。しかし今回は県有地部分を調査対象としたために古墳の南側が主体となり、全貌を把握するまでにはいたらなかったことを予め断つておく。また木本遺跡の所在する土地の地目が水田であるため、調査に際してトレンチ内での湧水が激しくトレンチ壁の崩壊がひんぱんにおこり、また土壤のグライ化による色調の変化も強く認められたため、特に墳裾部分の調査において実態の把握に手間取ったことを付記しておく。

(1) 墳形・規模の調査

墳裾部分の確認がその中心となる。当初石室主軸に平行するトレンチ2本（第1、2トレンチ）直交するトレンチ1本（第3トレンチ）の計3本を設けたが、第1、2トレンチにおいて遺構・遺物の検出が期待できたためその間に第4、5トレンチ、第2トレンチの東側に第6トレンチを増設して原状の把握につとめた。その結果南北に走る幅2.5m、深さ30～60cmあまりの溝状構造を検出した。内部に埴輪片・須恵器片を多量に包含しているものの墳丘中心部に近づくにつれて浅くなり消滅してしまうことが判明した。流水の痕跡はなく当初古墳の周溝とする考え方方が支配的であった。しかしこの遺構がその東側を並行して走る礫まじりの粘土層と無関係ではないことを確認した時点で再考を強いられた。礫まじりの層は地元古老および明治22年の切図の検討により県道開通以前の道路跡であることが明確になったが、これも溝状遺構と同様現墳丘裾部分で消滅しており第1トレンチではいずれも細認できなかった。遺構内堆積土は暗褐色を基調とした墳丘と同質の上で、現墳丘部分を除く周辺の土壤がいずれもグライ化しているのに対して、この部分での変化は認められなかった。

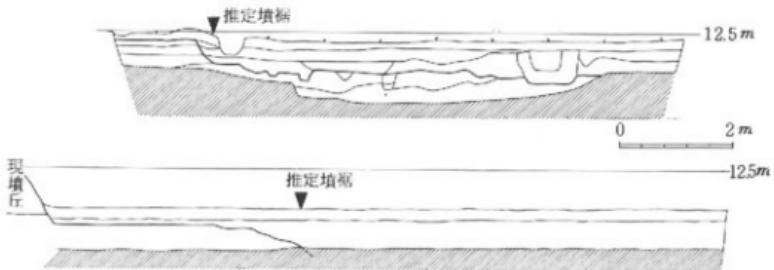


第2図 遺跡全体図



第3図 遺物出土状況（図中黒ベタは須恵器、●は石）

遺物は溝状遺構が消滅するあたり、石室中心部から約12m南の地点で集中して出土しているものの、完形品はなくいずれも細かく破碎された状態で集積しており、出土レベルも約30cm位の高低差がある。これらはとうてい原位置を保つものでなく二次堆積の可能性を考えさせる。さらに本来埴丘を飾ったとされる埴輪と、石室内副葬品であってしかるべき須恵器とが混在しているという事実もそのことを裏付ける資料として看過できない。これら遺物は前述のごとく溝状遺構内にその中心をおくが、他に現水田床土粘土層下からもかなり出土しており、その分布状態はほぼ一直線となっている。仮に後世の耕地整理に伴う埴丘破壊の結果の遺物散乱だとすれば、原埴丘内部においてこのような遺物の集積をみるとは考えられず、遺物を中心とした埴丘土の二次堆積は古墳の埴輪より外側であったとしてよからう。したがって溝状遺構が直接本遺跡に伴わないものであるとの断定が下せれば、石室中心部から約12m離れた遺物集積地帯を埴輪と推定せ



第4図 第1トレンチ(上) 第3トレンチ土壌断面図

ざるを得ないであろう。ちなみに十分な調査は不可能であったが、第3トレンチでは断面で見る限りにおいて石室中心から約10m地点で埴塁部分を確認している。このようにして考察を進めていくと埴塁近くの南側をめぐって流れる用水溝の位置も無視できなくなり、トレンチごとの断面では明確な判断は下せないものの、ほぼ20m規模の古墳とみてよかろう。しかし地形的にみて当時、より高いレベルにあったと思われる西側部分の調査を実施していない現在全くの推論にすぎず、ましてや墳形についての考察は無意味であろう。いずれにしても溝の有無も含めた民有地部分の再調査が是非必要であることを指摘しておく。

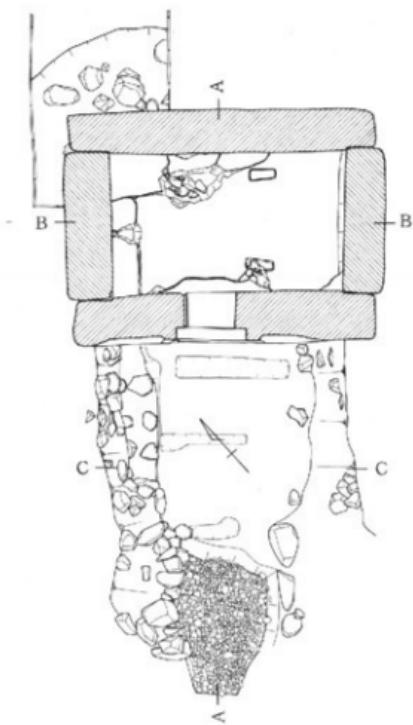
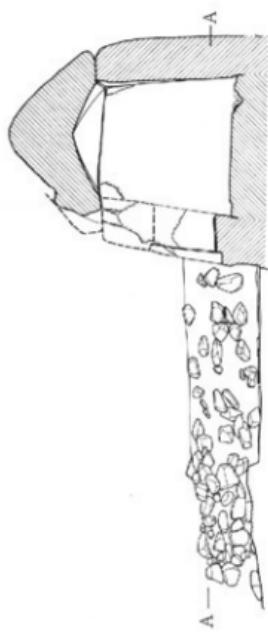
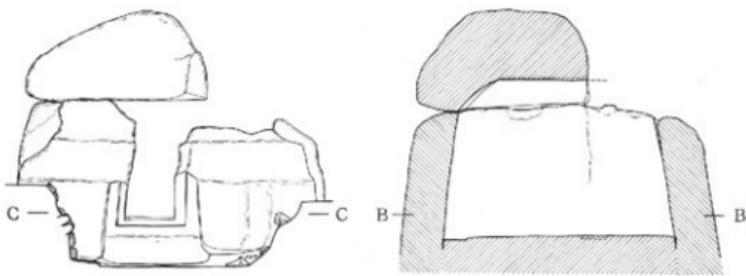
なお水田表面下約1mの青灰色粘土層内から縄文式土器片数点を検出したが、土層が動いた痕跡はなく、古墳築造以前において、当地を含む一帯が縄文時代遺跡であったことを発見した。遺構については不明である。

(2) 内部主体の調査

岩屋後古墳の内部主体は、現在上半部を露出して遺存する石室の形態から、主軸を南北方向にとった石棺式石室であることは既に周知のことであり、今回の調査の目的はその詳細な構造の検討にあること、前に述べたとおりである。調査の結果、この石室は奥室・前室の2つの空間の前部に羨道部をつけたいわゆる複室構造であったことが判明した。しかし前室部・羨道部は後世の破壊活動により、現在はその痕跡を残すのみである。

奥室平面形は幅3.3m、奥行2mの横長な長方形を呈する頗る大形のものである。側壁・天井石は各々1枚石で構成されており、床石も同様1枚石と思われるが、現在は数個体に割れている。側壁は平均70cmの厚さをもち、やや内傾して立てる。その際前後の側壁は、左右のそれをはさむような恰好で置き、接合部分を浅く削り込んでいる。床石との接合も同様の削り込みを四側壁につける。これら接合部分に白色粘土を用いて目張りをしていることが、奥壁と床面との接合部、および奥壁と左側壁との接合部外側に残る粘土塊から推測できる。

天井石は最大厚1.4mあまりをはかるが現在東側約3分の1を失なっている。内面は石室主軸と直交する方向に幅10cm程度の平坦面をもつ横の線を切り込み、平入り四注式の家形天井に加工



0 2m

第5図 内部主体実測図

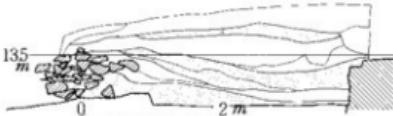
している。床面から棟の線までの高さは 2.3 m をはかる。天井石外側は封土の流失により風化が著しく、原形を留めないものおそらくその形状から推して内面と同様の家形に加工したものであろう。楕円形突起の存否については不明である。

床石は前壁および左側壁に沿った部分で破損している。これは後世のものと考えるより築造当時何らかの理由によって割れたものと解すべきであろう。床面中央右寄りの所に 2 個の方形切り込みが認められる。右側壁に近い方が若干広がった「ハ」の字状になっている。いずれも長さ 40 cm、幅 15 cm、深さ 4 cm 程度の浅いものである。今その性格について明確に規定し難いが、それらの切り込みと右側壁との幅が約 1.4 m をはかるところから考えれば、その空間を遺体安置の場所とすることが妥当である。奥室前壁につけた玄門部が左側に片寄って付けられていることもこれと関係すると思われ、したがって床面の方形切り込みは遺体安置用の施設（例えば石棺・石床など）の一部であると考えて間違いかどう。玄門部は上半部を欠失するものの閉塞用の切り込みをもつしっかりしたものである。幅 70 cm、奥行き 72 cm をはかり、切り込みの深さは 18 cm である。下面是外側に向かって若干の傾斜をもち、向かって左側の隅に浅い排水溝状の溝が走る。閉塞石は遺存しないが、板石であったと思われる。

奥室裏側の調査によって、石室構築に先立って掘られた墓塚を確認した。側壁との幅は約 2 m をはかり、羨道部までを含む椭円形の振り方と思われる。奥室、前室といった切石を主体に構築した部分については、墓塚との空間を割石によってつめ、裏込めとしている。

前室部は調査前において土砂が堆積していたため、その構造について全く不明であった。調査は石室と同方向の幅 4 m のレンチを設定することによりその振り方を確認し、内部を振り下げる方法をとった。表土をはいだ段階で奥室前壁付近から羨道部に向かって玄門部をはさんで並行して走る 2 列の石塊列を検出した。特に左側面におい

て遺存度が良好で、あたかも割石積の側壁を思わせた。しかし振り下げるにしたがいそれは規則性に乏しく、しかも壁面を構成し得ないと判断するにいたって、奥室外で検出した裏込めと同様のものと判定し、築造当初この



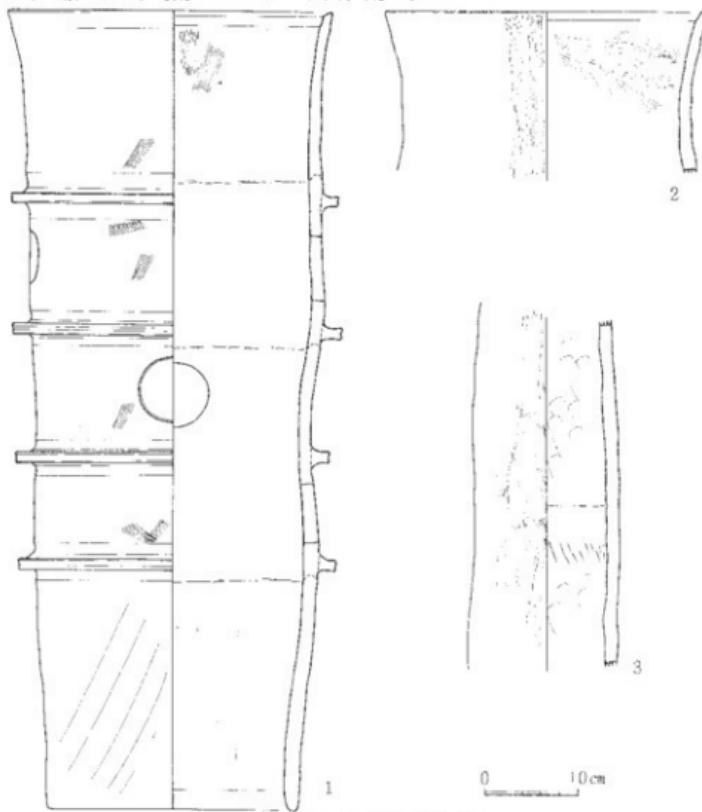
第 6 図 前室部堆積状況

部分に切石による空間が存在した可能性を考えた。これを裏付ける調査結果として次のようなものもある。まず奥室前壁前面の加工をみると、玄門部両端に幅 20 cm 程度の平坦面をつけた後、約 70 cm の幅で荒く削り取り、未調整のままでおく。また玄門部下端にも同様に未調整の部分が認められる。つまりこの部分は構築後直接目にふれる面ではなかったことを示しており、前室を構成する石材が接する部分であったと考えられる。さらに前室部左側床面はやはり 70 cm の幅で一段高くし、扁平割石を埋めこんでいる。これも石材の沈降を防ぐためと理解できる。これらから推測するに、前室はまず床石を置いた後それをはさむような恰好で側石を立て、天井石をおいたものといえる。天井石の架構方法については、奥室上半部の風化が著しいため正確には把めないもの

の、他の例から推して端部を奥室前壁上面に乗せたものと考えてよかろう。

羨道部は側壁を削石によって構成し、床面に川原礫を敷く。右側面および前面は破壊されているため規模等についての詳細は不明だが、現存幅 1.2 m、長さ 2 m をはかる。調査開始時この部分に人頭大割石が充填してあるのを確認しており、上層の製窯から玄門部の板石によるものと併せてここでも閉塞していたことが明らかになった。

以上内部主体についての復原的考察も含めた調査結果を述べたが、後述する通り本墳はかなり大規模な破壊活動がなされていたことも判明した。これの具体的事例は前室部堆積土の観察結果から明らかになった。すなわち堆積土中に石室を構成する石材と同質の石屑層が 3 層認められた。第 6 図中ドットで示した層がそれだけでも石室破壊に伴うものと考えられる。上層は玄門破壊面と同レベル、中層は玄門下而と、下層は前室床石下而とそれぞれ同レベルである。したがって少なくとも 3 回にわたる破壊活動が指摘でき、下層を前室部、中層・上層を奥室破壊に伴うものとそれぞれ理解したい。時期については全く不明である。

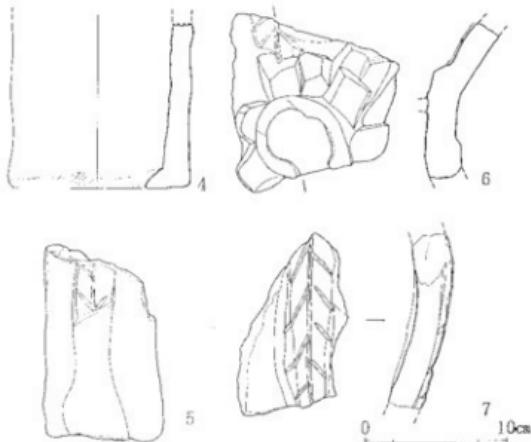


第 7 図 出土埴輪実測図(1)

4. 出土遺物

(1) 墓 繩

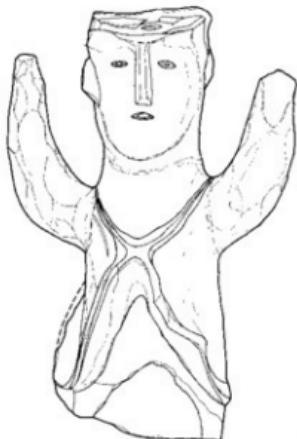
本項出土の埴輪は円筒埴輪を上とし、他に形象埴輪の部分と思われるものが若干含まれる。以下出土埴輪の概要を記すこととする。円筒埴輪は破片総数 500 点を超えるが、そのうちある程度復原可能なものは第 7 図に示した 2 点（1、2）を数え



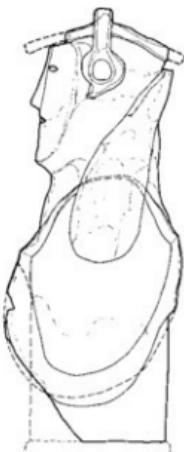
第 8 図 出土埴輪実測図(2)

るのみである。（1）は高さ 85 cm、口縁部径 34.5 cm、底径 26.8 cm をはかる大形のものである。突帯は 4 条認められ、いずれも高さ 2 cm、幅 1 cm 前後のかなりしっかりした粘土帯を巻きつけている。突帯断面は基本的には長方形ないし台形を呈すが、その端部は中凹み状になる。上下両側部共になだらかな直線を描いて撫でつけ、いずれの突帯も若干上向きに接合する傾向が認められる。器体部は表裏共に最下段を除いて刷毛状工具による整形がなされたものと思われるが、現在は風化も伝って判然としない。最下段は内外面共にナデて仕上げるが、全体にシボリの痕跡が明瞭に残る。全体のプロポーションは部分的に焼き歪みが認められるもののはば直線をなし口縁部は若干外反する。底部は内側に若干の傾斜をつける。また底面は丸くおさめる。器体の接合は観察できる範囲内で 3 か所認められ、いずれも突帯付近で行なわれている。したがって接合と突帯の取りつけは不可分のものであろう。透しは円形を呈し突帯にはさまれた部分に 2 個ずつ 3 段に千鳥に配する。胎土、焼成共に良好で略褐色を呈す。（2）は比較的大きく外反する口縁部のみの破片で口徑 35 cm をはかり、（1）と同様の大形品である。内外共に刷毛状工具による粗い整形痕が残り、刷毛目は表面はタテ方向、内面は斜めに走る。焼成は堅緻で暗赤褐色を呈すが、内面は一部須恵質化している。

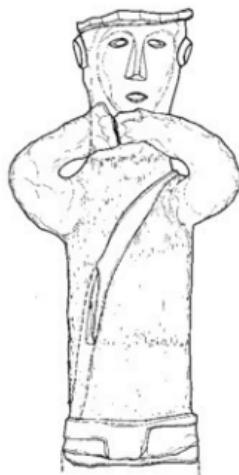
次に形象埴輪はいずれも形態不明な破片のみだが、そのうち円筒形を呈するもの（第 7 図 3、第 8 図 4、5）と曲面の一部を構成すると思われるもの（第 8 図 6、7）とに大別できる。（3）は現在高 37 cm、径 15 ~ 16 cm をはかる円筒で外部装飾は認められない。外面にはタテ方向の刷毛目がうっすらと残るが、内面は斜め方向に粗いナデの痕跡がみえる。また内面中ほどにヘラによる刺突文が認められ、この付近で接合したことが知れる。馬形埴輪等の脚部とも思える。（4）は人物埴輪の基底部と思えるものである。器壁は厚く特に底面は成形時に上からの圧力のためつぶれた



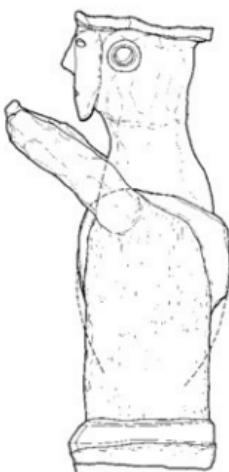
1



0 10 cm



2

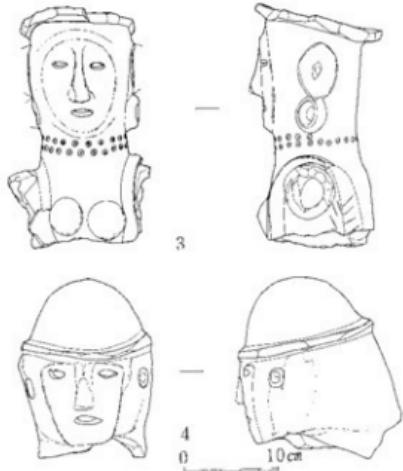


第9図 出土埴輪実測図(3) 東京国立博物館蔵

感じをうける。外面の調整は不明だが一部にかすかな斜枕線が残る。内面は凸凹が激しくかなり複雑なナデで調整する。外面底部には櫛状工具でつけたと思われる細い斜枕線が入っており、剥離面と思われるが詳細は不明である。(5)は不整円筒状を呈する埴輪片で、現存長13cmをはかる。表面に綾杉文を刻んだ帯を付けるが大部分は剥離している。内外共に調整は不明である。同様の帯を付けるものに6、7がある。(6)は断面厚2cmあまりをはかる破片で、表面頂部に円形を呈する破面が認められる。それから放射状に綾杉文をつける帯が最低2本のびる。その形状から人物埴輪の肩の部分あるいは馬形埴輪の脇部と思われる。(7)も綾杉文の帯をつける破片である。帯部は幅3.5cm、高さ0.5cmあまりの比較的しっかりしたものである。

以上が今回の調査で出土した埴輪だが、先に述べたとおり、本墳からは明治年間に出土したと伝える人物埴輪がある。いずれも埴丘の北西裾から出土したとされ、現在東京国立博物館に所蔵されている。ここにその実測図をあげ、概要を記しておく。①は現存長47cmの両手をあげる埴輪で、両肩から表裏共に交差する帯をかけている。頭髪は正面像では直線をなすが、側面では山形に表現し、その頂部を両耳にかける帶でおさえている。帯は肩の部分に表現はなく、下方にのびるに従って大きく誇張されている。手は短く指の表現はない。腰部以下は欠失するも、その部分に腰帯状の凸帯がめぐる。体部全体に指によるナデの痕跡が残り、また部分的に丹が残るところから全体的に丹塗であった可能性も考えられる。胎土に砂粒を若干含むものの良好である。しかし焼成はあまり良くななく軟質である。②は現存長49cmをはかる両手を前にまわし何かを捨てる恰好をした埴輪で、帯をけさがけに表現する。頭頂部は中四みの平坦面をなし方形の板を乗せ

た感じに仕上げる。耳は円筒形で貫通する。あるいは耳環を表現したものかも知れない。手は顎の高さで手を合わせるもの指の表現はなく、挿物を持った形跡も認められない。腰部には前面で結んだ帯を着用しており脇と思われる。表面の整形は頭部以上をナデ、以下を粗い刷毛目で行なう。①②共に顔面の表情は優しく、鼻が大きい割に目、口が小さいのが特徴で、特に目は若干下がり気味につけている。從来いずれも女性埴輪とされていたが、乳房の表現がないこと、②については桟状の帯をしめていることなどから男性と改めるべきであろう。(3)は現存長25cmをはかる女性埴輪で首に竹背文による



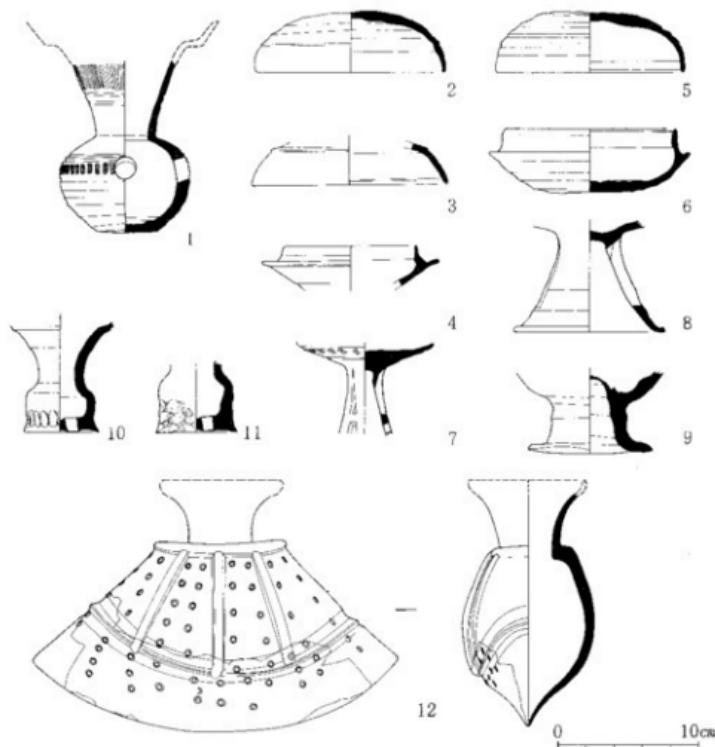
第10図・出土埴輪実測図(4) 東京国立博物館蔵

首飾をつける。この首飾は前面では二重になるが背面は一重である。頭部は2と同様中凹みの方形板を乗せる。耳は両方共に失なっているがその下方につけた耳原は旧状をよく留めている。この埴輪も両耳から襷様のものをかけるが、特に右肩からかけているそれは幅が広く肩布のようにも思える。顔はやはり鼻が大きいが柔軟な表情をみせる。(4)は頭部のみ残存する埴輪で高さ19cmをはかる。短かい庇をつけた帽子様のかぶりものを表現している。顔面が小さい割に首が太く若干うつむき加減になりそうである。鼻は欠損している。

以上4点はいずれも顔の表情等に類似点がみられ、あるいは同一人物の作にかかるものかも知れない。

(2)須恵器

いずれも埴輪片と作出したもので、層位的な違いもなく混在していた。破片が上で、そのうち形態の判別出来るものを第11図に示した。越(1)は頸部がラッパ状に開くもので、口縁部を欠く。頸部には2本の沈線を施し、それを境にして上半は難い柳目を縱方向に入れる。胸部はほぼ球形を呈し最大径は中央よりやや上に位置する。径9.2cmをはかりその部分に単位が5本からなる柳状工具による刺突文とその上下に沈線を施す。この文様帶の上から径1.5cm~1.6cmの円形の孔を斜め上方から穿つ。調整は文様帶以上はナデ、以下は回転ヘラケズリによっている。底部はロクロから切り離した後、回転ヘラケズリを行なって平坦に仕上げる。内面はナデによって仕上げる。胎土は若干の長石粒を含むが緻密で、焼成は堅密である。ロクロは右回転。蓋杯(2~6)のうち蓋はいずれも天井部をヘラケズリで仕上げるもので、口径は14cm前後をはかる。(2)は口縁部と天井部との境ににぶい段をつけるもので、全体に丸味をわびている。胎土には長石粒を含み良好だが焼成は悪く灰白色を呈するもろい土器である。(3)は口縁部が大きく広がるもので、天井部との境にはやはり段をつける。また口縁部内側には浅い沈線を1条入れ、二段口唇の名残りをとどめている。焼成が悪く、灰白色を呈しもろい。(4)は蓋杯の杯部あるいは有蓋高林の杯部のようにも思える破片である。復原口径は9.6cmをはかりやや小形に属す。立ち上がりは一組内側へのびた後折れて直立する。直立部分の厚さは他の部分と比べて薄くなっている。蓋受け部は細く斜め上方に張り出す。体部は浅く直線的でロート状をなす。(5)、(6)は以前本墳付近で採集したものである(現在大庭公民館蔵)。(5)はほぼ完形に近いもので全体的に丸味を帯び、口縁部と天井部との境には上下を回転によって強調したにぶい突起が認められる。また口縁部内面にも二段口唇の退化した弱い沈線を1条表現する。天井部外面の回転ヘラケズリは頂部にのみ認められる。(6)も同じく採集品であるが、(5)とセットをなすものではない。立上がりが比較的高くほぼ直立する。口唇部内面には1条の細い沈線が残る。蓋受け部は上面に若干の丸味をもち、立上がりとの間に回線状の凹みをつける。底部外面はその大部分を回転ヘラケズリで仕上げるが、他はすべてナデによる調整を行なう。ロクロ回転は右まわりである。胎土・焼成共に良好で暗灰色を呈す。高杯は脚部のみ3タイプ検出されている。(7)は2段3方に透しが認められる、いわゆる高脚系の高杯で、杯部上半と脚部下半をそれぞれ欠失する。



第11図 出土須恵器実測図

杯部底面には2条の沈線で区画された櫛状工具による刺突文帯がめぐる。透しは上段が三角形、下段は長方形を呈する。杯部がほぼ直立する無蓋高杯であろう。胎上・焼成共に良好でセピア色を呈す。（8）は杯部の大半を欠くもので、三角形の透しを一段二方に穿つものである。脚端部は上方に折り返して仕上げる。杯底部近くにはヘラケズリの痕跡が残るが、他はナデによって調整している。胎土は若干の長石粒を含むが焼成は良好である。灰色を呈す。（9）は全体のプロポーションがダレた感じのもので、杯部上半を欠く。脚部は接合部で5.7cmをはかるがほぼ垂直にのび、裾部でL字状に屈曲する。杯底部は高く盛り上がり、内面にタタキ痕が残る。全面をナデで仕上げる。胎上は網ごしをしたと思われる非常に良好なものが焼成はややもろく灰黄色を呈す。（10）、（11）は子持ち壺の子壺である。（10）は口縁部を欠くが、頸部は細長くラッパ状に開いて口縁部近くで段をなす。おそらく複合口縁的なものになろう。現存器高は7.3cmを

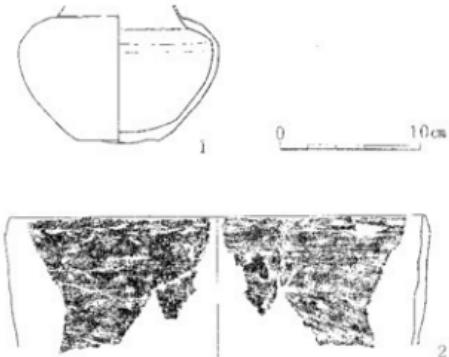
はかる。胸部はゆるやかにふくらんだ「たまねぎ」状を呈し、底部は本体から剥離したため平凹面になる。（11）は腹部のみの破片である。底面に穿孔があること、本体との接合のために腹部下間に指頭圧痕が残ること等、（10）と同様である。いずれも胎土、焼成共に良好である。（12）は皮袋形須恵器である。発見当初、口縁部のみを欠くほとんどすべてが破片の状態にはなっているものの、遺存していることを確認していたが、現場での因面作成の段階で壊難に遭ったものである。したがって図示したものは写真および若干残存した破片を合成したものである。それによると器高18cm、幅25cm余りをはかるもので、底部は曲線をなす。肩および腹部中ほどに凸帯を設け、それをつなぐように3本の凸帯が縦につく。さらに、表面全面を竹青文により飾るが規則性は認められない。なお、凸帯、竹青文いずれも裏面にはないことを確認しているが詳細は不明である。調整についても不明である。このような皮袋形を呈する須恵器は全国的にも類例が非常に少く、したがって時期的にも十分に検討がなされていないものである。しかし現在の所、他の須恵器と大きな時期差はないものと判断している。

以上今回出土した須恵器を見てきたが、いずれも時期的にみては同時と考えることができ、山陰の須恵器編年でいうところの第Ⅲ期、すなわち6世紀後半頃のものとしてよからう。ただし（9）については若干の疑問を持っていることをつけ加えておく。

13 龍文式土器

いずれも第2トレンチ、溝状遺構下部の青灰色粘土層で検出したものである。（第12図1）は口縁部から上を欠く壺形土器である。内輪外味の頸部は非常に薄いところで厚さ0.1cmをはかる。胸部との境には凹線状の凹みが巡る。胸部は肩が強く張り、最大径は胸幅の約5分の4の所にある。底部は一度回んだ後、再びふくらみ縫跡より外部に突出するため安定性は悪い。調整は頸部にナデが見えるにかは風化が著しく不明といわざるを得ない。胎土に砂粒を多量に含み、焼成はもろく赤褐色を呈す。薄手なつくりの優品であろう。（第12図2）は半縁の深鉢形土器片である。復原口径29.6cmをはかる。成形は輪積みによるとみられ、器面の凹凸が著しい。口縁はわずかに内傾し、口唇は尖り氣味になる。胸部の器厚は0.3~0.8cmをはかる。調整は内外面共に粗い擦痕が残る。胎土には若干の砂粒を含み、焼成はややもろい。暗褐色を呈す。

この他にも龍文式土器片は同層から若干検出している。いずれも内外に擦痕を残す腹部片である。（1）は山陰ではあまり類例をみない形であり、時期的



第12図 出土龍文式土器実況図

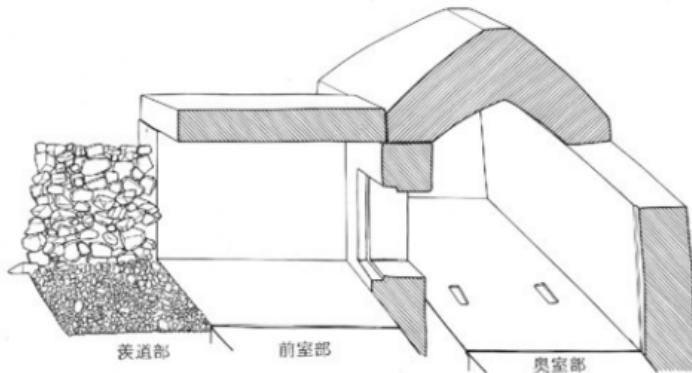
な判別もつきかねるが、(2)は粗製の深鉢で、楕円後期から晩期前半にかけて類例が知られている。しかし伴出する土器に後期的な要素を持ったものがなく、また晩期後半に出現する凸縁文も見当らないところから、概ね晩期前半の土器として位置づけられ、當時意宇平野あるいはその後背丘陵を生活の舞台とした人々の存在が想定できる。なおそれに伴う遺物および他の遺物は全く検出できなかった。

5. まとめ

調査の概要を記したとおり、墳形・規模の調査は、墳頂部分の確認が十分に出来ず当初の目標を達成したとはいえない結果に終った。しかし第3トレンチで検出した埴輪と思われる落込み、現在の墳丘の南側をめぐって走る浅い用水溝の存在、馬輪を中心とした遺物の出土場所等を総合的に検討した時、20m前後の規模をもつと考えた。また墳形については全く推定の域を出ないが、他の類似遺跡から推して円墳あるいは方墳の可能性を考えたい。しかしながら古墳へ向かって南北に走っていた道路跡、土壠のグライ化はその確認を予想以上に困難にしており、早い時期での西側を中心とした民有地部分の調査が望まれる。

石室については羨道部・前室部・奥室部といった複室構造をもつ整美な石棺式石室であることが判明した。しかし前室部堆積上の断面觀察において、最低3回におよぶ盗掘・破壊を経ていることが推定でき、現在わずかに奥室部分が残存するのみである。調査結果をもとに木石室の復原を試みると第13図のようになろう。奥室は床石を置いた後壁面を互いに内傾させて立て、その隙間を白色粘土でふさぎ、内外面共に平入り四注式の家形に加工した天井石を乗せる。床石と側壁および倒壁同志の接合にあたっては浅い削り込みを入れ、隙間があくのを防いでいる。玄門部は奥室前壁の向かってやや左寄りを削り抜き、さらに内側用削り込みをつける。前室部は奥壁、前壁を除く四面を各一枚の切石で構成し、奥室前壁外側にはそれらとの接合をよくするため荒く削り込むが天井は平天井でその端を奥室前壁上端に架構する。羨道部は側壁を割石積とし、床面に川原礫を敷きつめた後、滑石による滑塗を行なう。また石室は埴丘を盛った後、墓室を掘り、石室構築と共に墓室との間を割石でつめ、表込めとしている。さらに前室床面で検出した横3本の浅い溝は石材運搬の際に出来た枕木の跡と思われ、レールを敷いた後修羅状の運搬具で運んだことが考えられる。なお当時の意宇川は地形からみて、本墳のすぐ東側を流れていたものと思われ、川を使った石材運搬の可能性が強い。

遺物は埴輪推定部分を中心として、埴輪・須恵器を検出したが、いずれも原位置を保つものとは考えられないところから、古墳の破壊に伴い二次的に集積したものと判断した。須恵器はいずれもその形態から山陰地方須恵器編年のⅢ期に属すと思われ、古墳の染透時期も概ねこの頃と考えてよからう。また亞難に遭ったが県下初の皮袋形須恵器の出土をみたことも特筆すべきである。埴輪は人物、馬、円筒が確認されているが、特に人物埴輪については祥をかけるという独特な表現方法を用いており、稚拙な中にも素朴な表情をたたえる優品である。今回出土した埴輪のうち



第13図 石室復原模式図

円筒埴輪は高さ 80 cm 以上をはかる大形品であるうえに丁寧な作りである。従来埴輪の施年研究は他分野に比べ遅れているとされるものの、本墳出土のそれが古式の様相を具えていることは衆目の一一致するところである。本墳とほぼ同年代の製造にかかると思われる岡田山第1号墳出土の埴輪もしかりである。これらのことから出雲における埴輪は他地域（特に西日本において）に比べ、かなり時代が下るまで伝統的手法を受けついできたとしてよからう。

以上調査の結果を若干の私見も加えて述べてきた。いずれにしても本墳を含めて石棺式石室のもう一つ問題点は多岐にわたり、その解明には今少しの時間を必要とする。今後は石材鑑定も含めた総合的な形態分類、同時期墳墓との比較検討などの作業を経てはじめて出雲古墳文化の中での正当な位置付けが可能であることを指摘しておきたい。



遺跡遠景
(西から)



調査前の墳丘と
石室（南から）



調査前の墳裾部
分（第2トレン
チ、北から）



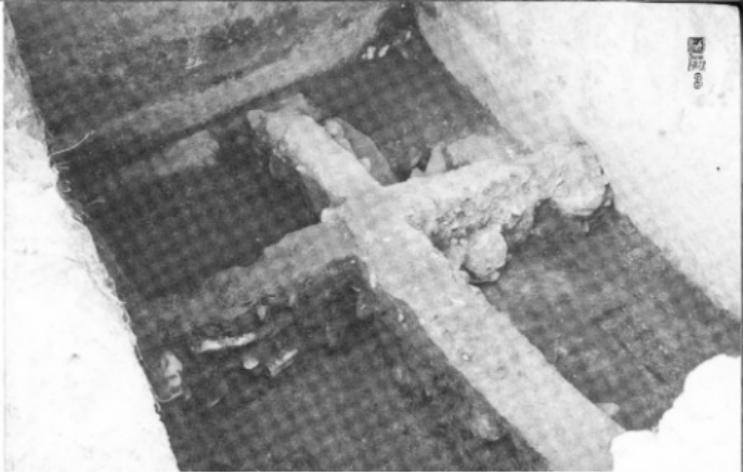
遺物出土状況
(第4、5トレ
ンチ、北から)



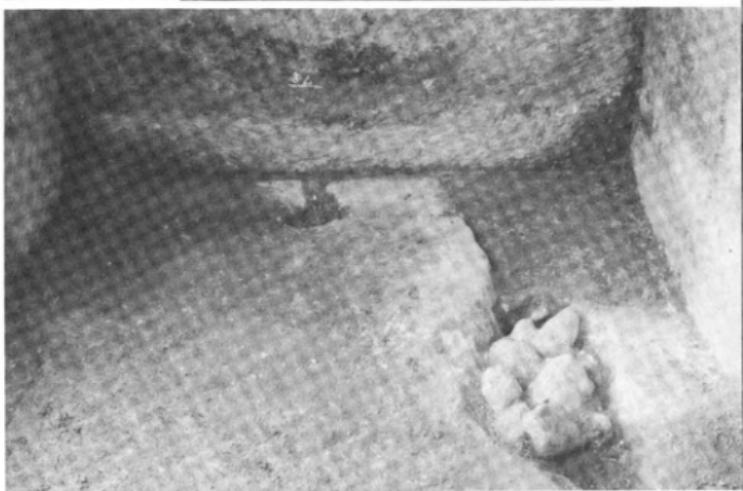
遺物出土状況
(第4トレ
ンチ)



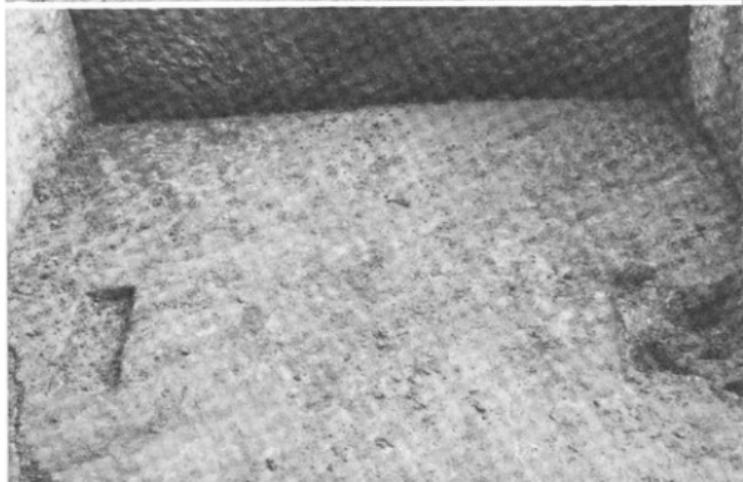
遺物出土状況
(第2トレ
ンチ)



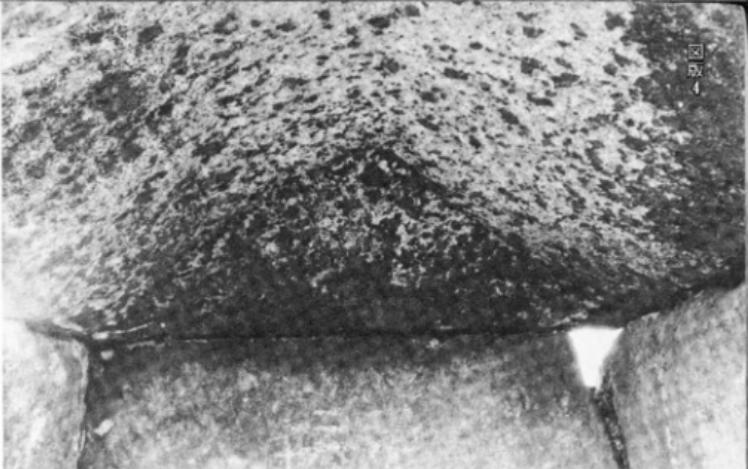
奥室内堆積土の
状況（東から）



奥室内床面
(西半部)



奥室内床面
(東半部)



奥室天井石の加工

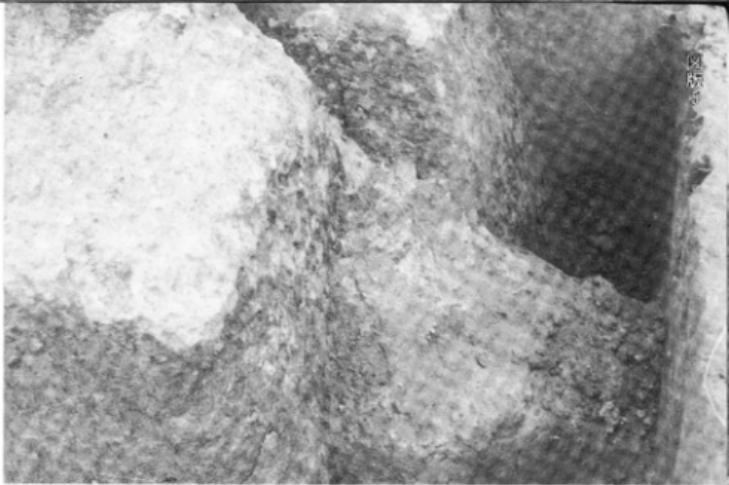


奥室内側壁結合
の状況（奥壁と
東側壁）

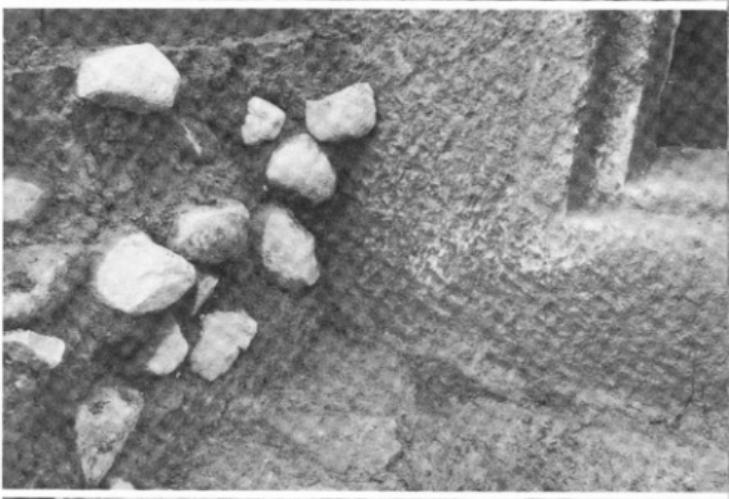


石室振り方の線
と裏込め石

奥室外側の粘土
による目張りの
状況



奥室前壁前面の
加工（西半部）



奥室前壁前面の
加工（東半部）





前室・羨道部調
査直後の状況



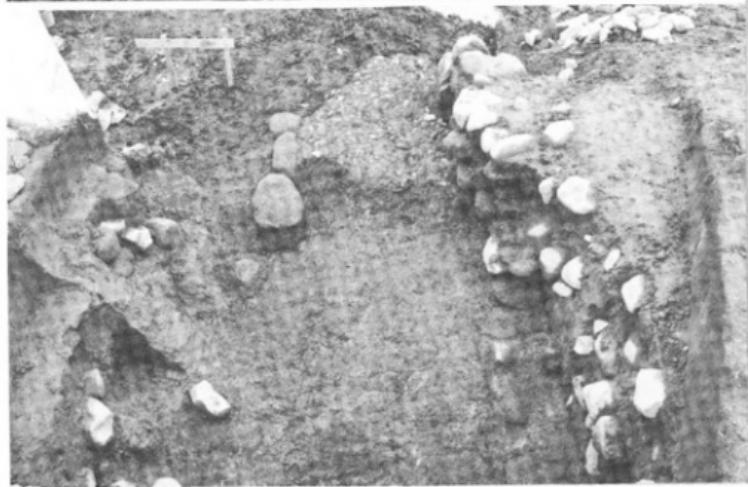
前室堆積土の状
況（上層の石屑
層）



前室堆積土の状
況（白っぽい層
が石屑層）



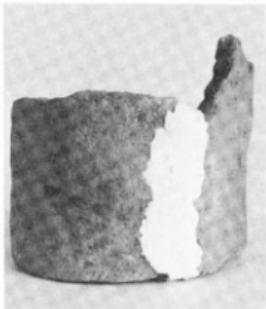
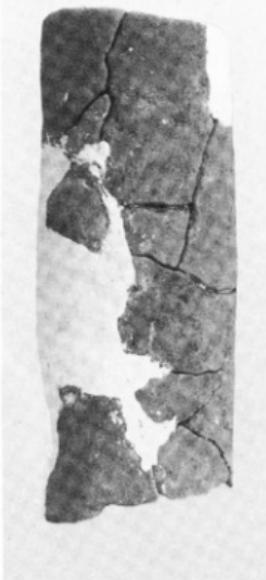
調査後の石室



調査後の前室・
羨道部



調査後の羨道部
の状況



出土遺物 1

7 図 3 | 7
8 図 4 | 1



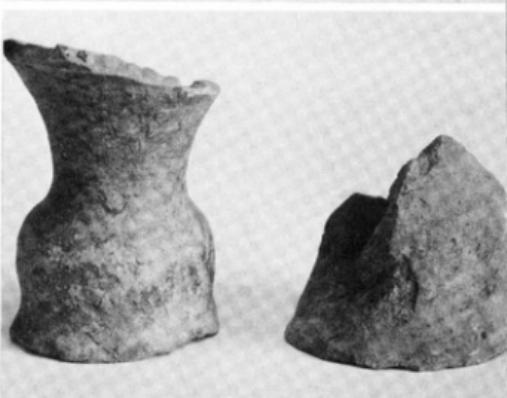
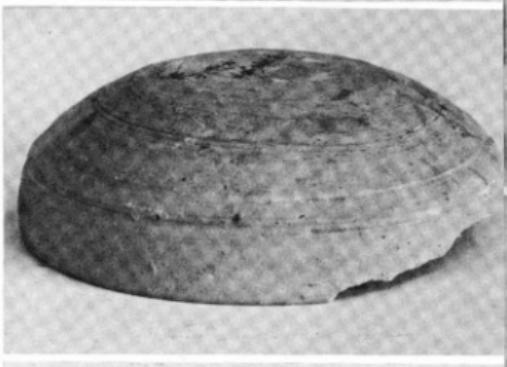
8 | 8
6 | 7
5 | 5





出土遺物 2
(東京国立博物館藏)

第 9 圖 2	第 9 圖 1
第 10 圖 4	第 10 圖 3



第11図 1

第11図 2

出土遺物 3

第11図 5

第11図 6

第11図 7

第11図 8

第11図 10、 11



第11図 12

上 出土状況
下 残存部分

出土遺物 4



第12図 1

第12図 2 (右、表面)



岩屋後古墳発掘調査概報

昭和53年 3月20日発行

編集・発行 烏根県教育委員会文化課
松江市殿町1番地

印 刷 株式会社 報 光 社
平田市平田町993